

二条大路木簡の世界

— 736年の吉野行幸を契機に形成された一大木簡群 —

二条大路木簡は、平城京跡左京三条二坊八坪と二条二坊五坪の間の二条大路の路面上の南北両端に細長く掘られた三条の濠状遺構から出土したもので、総計は74,000点。これまで日本で見つかった中では最大規模の木簡群です。

長屋王の旧宅を皇后宮としてたまわった聖武天皇の皇后藤原光明子に関わるもので、皇后宮の警備を担当した左右兵衛府や中衛府などの軍隊の木簡と、皇后宮の活動を支えた兄の兵部卿藤原麻呂の家政機関の木簡の、大きく二群から構成されています。平城京内で見つかった木簡であるにもかかわらず、これまで平城宮内で見つかったどの木簡よりも王権に密着した木簡群で、これに先立って見つかった長屋王家木簡35,000点とともに、日本の古代律令国家の解明に、また木簡そのものの研究に、大きな影響を与える木簡群となりつつあります。

木簡群が使用された契機は、天平8年(736)6月27日から7月13日にかけて行われた聖武天皇の吉野(芳野)離宮への行幸で、この行幸は二条大路木簡を読み解くカギになるとみられます。今回は、出土から20年を機に、2009年10月20日から11月29日まで奈良文化財研究所ガイダンスコーナーで行った「地下の正倉院展—二条大路木簡の世界」で展示した木簡の中から、この吉野行幸に関わる木簡を中心に紹介します。(都城発掘調査部 渡辺 晃宏)

行幸残金の付札兼使用記録 行幸の食料調達用に使った銭の残りの付札。七月十六日時点での残金とその後の使途を記録しています。蛙や鴨などの食材購入のほか、網曳御厨への派遣費用、ツケの支払い、仏教行事への寄附などさまざまな用途に支出されています。

長さ三〇〇mm・幅五九mm・厚さ五mm



行幸調度の貫簀の付札 行幸終了後、使用しなかった貫簀(竹を編んで作った簀)に付けた整理用の付札。使用済みのものに付けた「用貫簀」と書かれたこれと対になる木簡も出土しています。

長さ一三五mm・幅二四mm・厚さ三mm



天皇の乗物の部材の記録 大御輿(天皇の輿)の部材の袋の記録。行幸の準備、または後片付けに関わる可能性があります。裏面の「飯船」も輿の部材かも知れません。

長さ二〇五mm・幅三〇mm・厚さ五mm



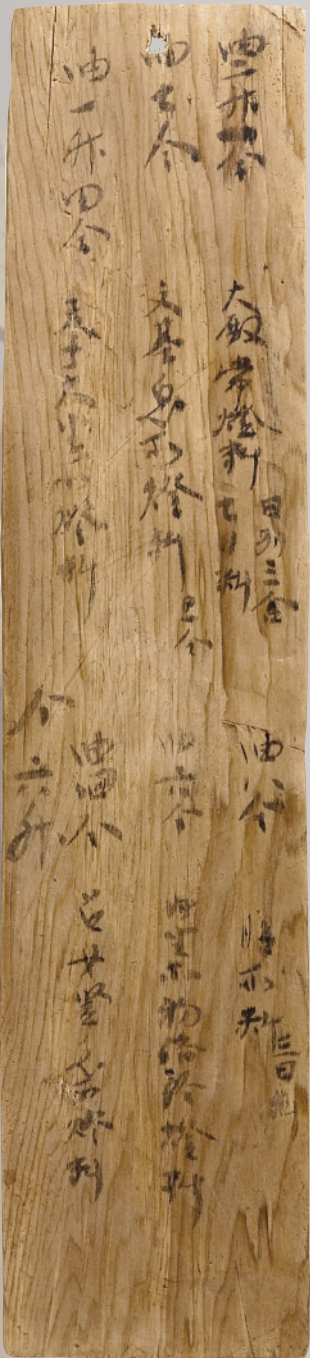
槐の花の送り状 右京四条から届けられた槐の花の送り状の一点。平城京に街路樹として植えられていた槐の花を、漢方薬用に拾って貢進したようです。同種の木簡は行幸直前の六月八日から十四日に集中していますので、行幸に備えて薬の原料を集めさせた可能性があります。

長さ二六四mm・幅三七mm・厚さ三mm



聖武天皇滞在中の皇后宮の油の使用記録と天然痘除けの呪句 不要になった文書箱の蓋を油の使用記録に再利用した木簡。
行幸の帰途、聖武天皇が皇后宮に滞在した際の記録と推定されます。裏面には平城京で流行り始めていた天然痘が山陽道に
退くよう祈願するまじないの文言が書き加えられています。

長さ三六〇mm・幅八〇mm・厚さ一五mm



^{あつもの}羹と氷の送り状 越田瓦屋が、借子四人を派遣した時の木簡。羹（肉や野菜入りの熱いスープ）と氷の櫃を携えて、子一点
（午後二時）に進上しています。越田周辺の平城京南辺は光明皇后との所縁の深い地域とみられ、行幸の期間中の木簡ですから、
聖武天皇の皇后宮滞在と関連するとみられます。

長さ三六九mm・幅（五一）mm・厚さ一〇mm

